

浄土学専攻

聖岡上人の教判説

井上 孝雄

一

元祖が浄土宗を開宗されて後、二祖聖光三祖良忠の出るに及んで、その教義内容が大成されてきたのであるが三祖以後は単にこれを継承持続して行つたに過ぎないのであつて、特にその門下よりは六派の分裂が起り、白旗寂慧が正統の法流を伝承したといふものゝ、なおすぐれた名匠も出ることなく、宗勢は依然として振はなかつたのである。このような状態のうちにあつて、七祖聖岡の時代を迎えたのである。彼の当時は禪の非常に盛んな時で、その禪からの浄土に対する非難圧迫が烈しかつたのであり、彼の教学を考察する場合には、その時代背景となる禪の影響を無視することはできない。今この点を付加して彼の教学の中心ともいふべき教判を考察しよう。

二

東福寺の虎関師鍊は「元亨釈書」巻第二十七諸宗志の中で三論、唯識、律、華嚴、天台、密、禪の七宗は日本現在の宗旨というものであると断じ、その当時はこれを講ずるものがあつても宗派としての命脈のなかつた俱舎、成実と浄土の三宗を国の附庸国に譬え寓宗と称して独立の大宗としての存在を認めていない。浄土は伝灯の統系がないから寓宗といわれる所以だとしている。この虎関の「元亨釈書」は聖岡の出生以前になされたのであるが今聖岡の時代には天竜寺の夢窓疎石も浄土宗をもつて大乘でなく小乗であり、難行であると非難したのである。

こゝに聖岡はこれらに対抗し、浄土宗独立の価値を顕彰すべく努力したのである。この結果、組織面に於ては浄土宗の伝灯を明すため宗戒両識の制定及び五重相伝の創設をなし、教学面に於ては二蔵二教二頓判説を顕彰し、浄土宗の大乘であること及び相頓であつて易行であることを強調するにいたつた。

三

元祖は「選択集」に二門判を用いて浄土宗の教判を明しているが、「無量寿経釈」には明白に二教判を窺ひ知

ることができる。即ち

天台真言皆雖名「頓教」然彼斷「惑証理」故猶是漸教也明「未斷惑」凡夫直出過三界之長夜者偏是

此教故以此教為頓中之頓也

とあり、これは元祖が善導の二教判の意味をおしひろめてあらたに頓教を頓中漸と頓中頓とに分けて、浄土宗をもつて頓中頓とし浄土の教法の深勝性を表わしているのであり、ここに元祖が二教判を浄土の教判として組織立てようとされた意趣を窺い知るのである。

次に二祖は「浄土宗要集」に浄土宗をもつて頓教一乗とし、その教法の深勝なることを論述している。その後この傾向は更に進展して行き、了慧道光もこの説をうけ「選択大綱鈔」に浄土をもつて頓教一乘根本真実の法であるとし、更に聖岡と同代の先輩である澄円も「浄土十勝論」に浄土をもつて「真実究竟最上大乗頓法」といい、浄土門の教法としての深勝性を顕揚している。

かように窺つてくると、聖岡の教判はあながち彼の独創ということはできない。元祖や二祖に於て二門判と共に二教判が重視されていたのであり、聖岡以前に二教判

は組織されつゝあつたと思われ、彼の当時は二教判が組織大成されるべき時代であつたのである。

四

聖岡の二蔵二教二頓判は、善導の二蔵二教判に立脚し菩薩流支の作と伝える。「麒麟聖財論」に依り成立したのである。彼の教判は一代仏教を二分して声聞蔵菩薩蔵とし、声聞蔵は小乗であり、菩薩蔵は大乗である。更に菩薩蔵を漸頓二教に分け、漸教を細分して初分教と後分教とするが、共に階位を経て漸次に仏道を成ずるが故に同じく漸教と名づける。他方、次第階位を借らないで頓速に涅槃を証する法門を頓教という。頓教を更に細分して性頓教と相頓教に分判し、唯理唯性の華天密禪を性頓とし、事理縦横自在無礙、頓中頓の浄土宗を相頓とし、浄土の教法の深勝なることを明白にされたのである。

